

## 博士論文要約

### 論文題目

急性心筋梗塞患者の生活の再編成を支える継続看護提供システムの構築に関する研究  
Formulation of a Nursing System that Supports the Lifestyle Changes of  
Acute Myocardial Infarction Patients

岐阜県立看護大学大学院看護学研究科

学籍番号 1213001

北村 直子

Naoko Kitamura

### 第1章 序論

#### I. 研究の背景

近年、急性心筋梗塞(以下、AMI)に対する再灌流療法や合併症管理方法の進歩により、AMI患者の多くが急性期を乗り越え社会復帰を果たしている。急性期を乗り越えた人々にはその後の生活で二次予防に取り組むことが期待され、それらの人々を支援することは看護師の責務である。AMI患者を対象とした継続的な教育支援は近年、取り組まれるようになってきている(宮園ら, 2012; 松本, 2012)が、未だ実施率、内容ともに十分ではない(原田ら, 2011)。多くの急性心筋梗塞発症を乗り越えた人々が看護師による継続的な支援を受けるためには、それぞれの施設が先進的な取り組みを参考にしながら、施設の現状にあった方法で継続看護を提供するしくみを構築する必要がある。

#### II. 研究目的

本研究の目的は、AMIを発症した患者の生活の再編成を支える看護を提供するシステム構築をめざす取り組みを記述し、AMIを発症した患者の生活の再編成を支える看護およびその看護を提供するシステム構築のあり方を検討することである。

本研究において、AMIを発症した患者の生活の再編成(以下、「生活の再編成」)とは、心筋梗塞の再発や心不全への進展を予防するために、実践可能で効果的な療養行動をこれまでの生活に組み込むことであり、患者が療養行動を継続しながら質の高い生活を生涯送ることをめざすものとする。また、本研究において看護を提供するシステムとは、看護が提供される場において、本研究の取り組みが終了した後も、めざす目的に合致した看護援助が方法の変化を許容しながら引き続いて行われることをめざすものである。

#### III. 研究の全体構成

本研究は、3つの研究から構成される。

##### 1. 研究1

対象施設において過去に看護提供を受けた心筋梗塞患者の発症から1年の体験から、患者ニーズをあきらかにし、対象施設における看護の方法を検討する資料を得る。

##### 2. 研究2

「生活の再編成」を支える継続看護の提供方法（以下、「提供方法」）を現場の看護師と検討し、「提供方法」を実施する実践的取り組みを通して、看護を提供するシステムを構築する過程を記述する。

### 3. 研究 3

研究 2 の実践的取り組みを、実践的取り組みにおいて看護提供を受けた患者と看護提供を検討し実践した看護師の意見から評価する。

## IV. 倫理的配慮

研究協力者に、研究の目的、方法、研究協力者が協力すること、協力の自由意思と匿名性の保障について、書面を用いて口頭で説明し、同意を得た。なお、本研究の計画は岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した（承認年月：2014年5月、26-A008D-1）。

## 第2章 研究1

### I. 目的

AMIの発症を経験し、生活の再編成に取り組む患者の療養生活に対する認識と取り組みをあきらかにし、対象のニーズを検討し、対象施設において「提供方法」を検討するための資料を得る。

### II. 方法

対象施設に入院・通院中の心筋梗塞患者で、発症から1年程度経過した75歳未満の患者を対象とし、半構成面接を行い、逐語録を質的に分析する。

### III. 結果

面接対象者は男性5名、女性1名、年齢は52～66歳、全員が発症時初期治療として経皮的冠動脈形成術を受けていた。面接時間は25～40分であった。面接逐語録の分析から、「自分の病状や療養生活に対する認識」として【心筋梗塞を発症した体験を意味づける】【発症前の生活を振り返る】【発症後の生活を熟考する】、「生活の再編成のために取り組んでいること」として【療養生活について情報を得る】【自分の状況を確認・理解する】【療養行動を実践する】【心筋梗塞を患った自分を意識して生活する】、「療養生活で困っていること」として【生活や活動で困りごとはない】【自分の身体は万全でなく不安がある】【療養行動が適切に行えない】【療養行動のため我慢するつらさがある】、「療養生活に役立つこと」として【自分の生活に沿った支援が受けられる】【医師から療養行動を勧められる】【看護師からは特に支援を受けていない】といった表題が明らかになった。

## 第3章 研究2

### I. 目的

「提供方法」を現場の看護職と検討し実施する実践的取り組みを通して、「生活の再編成」を支える継続看護の方法と体制を構築する過程を記述する。

## II. 実践的取り組みの全体構成

実践的取り組みは2014年10月から2015年10月の期間に、およそ600床を有する2次医療圏の基幹病院の循環器病棟と内科外来部門で行った。看護部から推薦を受けた病棟看護師2名、外来看護師1名と外部研究者である筆者からなる研究チームメンバーを中心に「提供方法」を検討（以下、「実践的取り組みその1」とする）し、検討した「提供方法」を病棟および外来で実践（以下、「実践的取り組みその2」）した。「実践的取り組みその1」は原案作成と改定案作成の2つの段階を、「実践的取り組みその2」は原案と改定案それぞれに基づいた看護実践が含まれた。また、これらの過程には、検討した「提供方法」に基づいた看護実践からさらに「提供方法」を検討するという循環が内包されていた（図）。

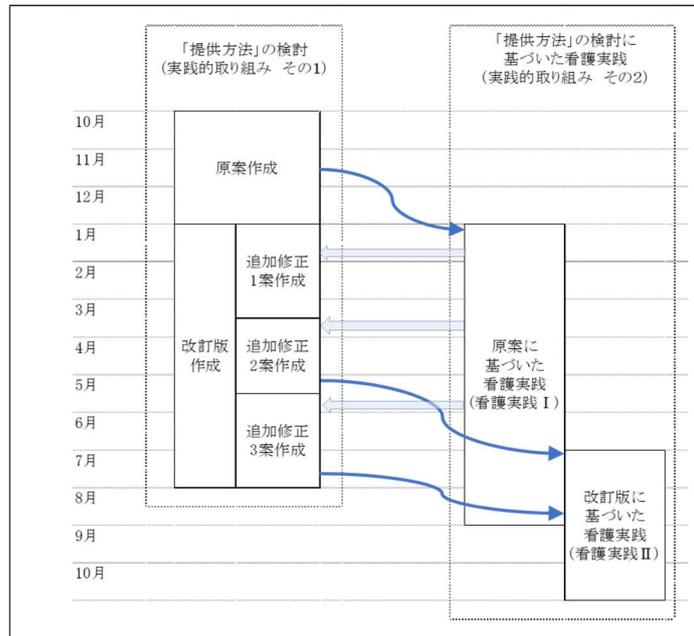


図 研究2 実践的取り組みの全体構成

## III. 実践的取り組みを記述する方法

「実践的取り組みその1」を記述するために、「提供方法」の検討のために開催した研究チーム検討会の逐語録および病棟看護師を対象とした質問紙調査を質的に分析した。

「実践的取り組みその2」を記述するために、病棟および外来看護師が記載した対象患者の看護経過記録および療養指導記録から看護援助を抽出して分類する方法と対象患者に生活の再編成の状況を尋ねる面接調査を実施し質的に分析する方法をとった。

## IV. 結果

### 1. 「実践的取り組みその1」

原案作成のために2回の研究チーム検討会を行った。2回の検討会の逐語録を分析した結果、現状の支援方法として「入院中の患者・家族に対する療養指導の内容と方法」「入院中の患者・家族に対する他職種による療養指導」、現状の問題・課題として「療養指導実践の充実における問題・課題」「病棟と外来で連携した継続看護における問題・課題」「病棟全体で療養指導を実践する上での問題・課題」「他職種と連携した療養指導を実践する上での課題」、検討した「生活の再編成」を支える継続看護として「病棟での療養指導の方法」「外来での療養指導の方法」「療養指導の記録方法」「病棟と外来との継続看護の方法」「内科外来全体の取り組みとして療養指導を行う方法」「他職種と協働して療養指導を行う方法」が整理された。

改訂版作成は、研究チーム検討会での検討を経て、追加修正案が3回作成され、3つめの

追加修正案を最終的な改訂版とした。追加修正案の作成は、原案に基づいた看護実践を対象患者 5 名に提供する看護実践 I と並行して行った。1 つ目の追加修正案は看護実践 I の対象患者の具体的な支援方法の検討を踏まえて作成した。2 つ目の追加修正案は看護実践 I での外来での看護実践を病棟看護師と共有したのち、病棟看護師の意見を尋ねる質問紙調査を行い、その結果を反映させて作成した。3 つ目の追加修正案は看護実践 I の外来看護記録を整理した結果を研究チーム検討会で共有しつつ検討し、作成した。

追加修正 1 案作成の過程では 4 回の研究チーム検討会を開催し、検討会の逐語録を分析した結果、「看護実践 I の対象患者への具体的な支援方法の検討」として【患者の療養行動に関連する背景について共有する】【入院中の患者の療養行動と援助について共有する】【外来面談で捉えた退院後の患者の療養生活について共有する】【外来での具体的な援助を検討する】【実践した援助を共有し評価する】を、『提供方法』の検討』として【「生活の再編成」を支援する継続看護の方法を検討する】【「生活の再編成」を支援するニーズと成果を認識する】【過去事例の共有により「生活の再編成」を支援する方法を検討する】【実践的取り組みの進め方を検討する】が検討内容として明らかになった。

追加修正 2 案作成の過程では、研究 1 の結果と看護実践 I の対象患者に対する外来での看護について共有することを目的とした「病棟看護師と共有する会」を開催した後に、病棟看護師を対象とした質問紙による意見調査を行い、その結果を研究チームで共有した上で追加修正を行った。「病棟看護師と共有する会」は病棟看護師 26 名中 18 名が参加し、意見調査は時短勤務者を除いた 22 名を対象とし 21 名から回答が得られた。意見調査の結果から、病棟看護師が認識する急性心筋梗塞患者への重要な支援として〔患者自身がこれまでの生活を見直し、自身の病状を理解し、心筋梗塞再発や心不全発症を予防するための生活編成に取り組むことを支援する〕〔急性心筋梗塞発症の危機状態にある患者および家族の全人的回復を支援する〕〔患者が心筋梗塞再発や心不全発症を予防する意識を継続できるよう支援する〕が明らかになり、さらに支援をよりよくするために必要なこととして〔家族への指導を行う〕〔入院中に指導したことが退院後に継続できているかを外来で確認する〕〔退院後の生活で気をつけていきたいことを患者とじっくり話す〕〔生活指導に必要な情報を収集し、記録して外来と共有する〕〔退院後の生活で患者が継続していること、努力していることを確認して、認める〕などが明らかになった。

病棟看護師を対象とした意見調査の結果を共有しさらに検討するための研究チーム検討会を 2 回開催し、それらの検討会では「家族を含めた支援」「療養指導記録に追加する記載内容」「入院サマリーの記載内容」が検討され、追加修正案に反映された。

追加修正 3 案作成の過程では、原案に基づいた外来での看護実践 I を踏まえて検討するために、この時点で外来での支援を実施していた対象患者 3 名の外来看護記録から看護援助内容を整理した資料を検討素材とし、研究チーム検討会を行った。研究チーム検討会の逐語録を分析した結果、【外来での支援方法の検討】として〔病状管理に関連するデータを経時的に捉え、患者とともに確認する〕〔患者のセルフモニタリング行動をアセスメントし支援する〕〔適切な療養方法の判断に迷うときは他の専門職に問い合わせるなどして協力を得

る)など、【チームで援助を継続するための方法の検討】として〔面談を記録する際に次回の面談について計画をたてる〕〔多職種・病棟・外来で情報を共有しやすい記録様式を検討する〕などが明らかになった。

## 2. 実践的取り組みその2

実践的取り組みその2の対象患者は男性8名、女性1名、年齢は40歳代後半から70歳代前半の9名であった。対象患者の病棟入院日数は11～14日間、調査期間中の外来診察は2～7回であった。

対象患者の入院中の看護経過記録および療養指導記録から「生活の再編成を支える看護」を抽出した結果、「生活の再編成を支える援助の実施」として〔心筋梗塞患者に共通した療養指導の実施〕〔対象者の状況に沿った療養生活指導の実施〕、「生活の再編成に関連した情報の収集および確認」として〔生活の把握〕〔療養行動実施に対する思いの把握〕〔療養行動に関する理解の把握〕〔入院中の療養行動の把握〕〔病態・治療の把握〕などの看護援助が明らかになった。また、外来看護経過記録から「生活の再編成を支える看護」を抽出した結果、「療養生活について患者・家族から話を聴く」「療養生活を送る患者と家族の認識について把握する」「患者が実施している療養行動について把握する」「療養生活における仕事の再開について聴取する」「患者の病状や冠危険因子についてアセスメントする」「療養生活を支援するために説明・助言する」「療養行動のしやすさを支える」「今後の援助を計画する」が明らかになった。

対象患者9名を対象に、退院前及び退院後に「生活の再編成」の状況について面接を行った。すべての対象患者が退院前には「今後の生活で取り組もうと考えていること」について語り、退院後の面接では生活の中で何かしら取り組んでいることについて語った。例えば、中小企業の経営者であったB氏は退院前に「仕事の時間を大幅に減らすことは困難だが、従業員から協力を得る、家族も含めて減塩の食事に取り組む」などの目標を語り、退院から7か月半後の面接では「食事を腹八分目とする」、「力仕事を避け、体を休める」、「自己測定した血圧をグラフ化し、血圧変動を把握して医師に相談する」といった療養行動を継続していることを話した。

## 第4章 研究3

### I. 目的

「生活の再編成」を支える継続看護の提供方法を検討し実践する実践的取り組みを看護の提供を受けた患者と看護を提供した看護師の意見から評価する。

### II. 方法

患者を対象とした調査は退院前と退院後に面接を行い、看護師による支援に対する評価を尋ねた。看護師を対象とした調査はグループインタビュー、評価カンファレンス、個別面接や質問紙調査の方法をとり、実践的取り組みを通して自分及び部署の看護実践で変化したこと、患者の反応などから援助の評価として考えられたこと、実践的取り組みの進め方についてよかったこと等を尋ねた。

### III. 結果

対象患者 9 名の面接調査から、看護師による支援に対する評価を分析した結果、入院中に看護に対して〔看護師の説明により病気や療養生活について理解できた〕〔質問しやすく、確実に答えてくれることで信頼できる〕などが、外来での看護に対して〔自分の療養生活について話を聴いてもらえることがよい〕〔外来で多職種から説明を受けることができて、療養生活が送りやすかった〕などが明らかになった。

調査対象の病棟看護師 24 名中 17 名から質問紙による回答が得られ、「実践的取り組みを通して自分の看護実践で変化したこと」として〔患者の生活を捉えた療養指導を行う〕〔必要な患者に療養指導を確実に行う〕など、「病棟の看護実践で変化したこと」として〔チームで療養生活指導を実施するようになった〕〔個々の病棟看護師の意識・姿勢が変化した〕などがあきらかになった。「患者の反応などから援助の評価として考えられたこと」としては〔退院後の生活で取り組むことを患者が明確に話すことができていた〕〔退院後の生活に対する患者の疑問や不安を捉えることができた〕などが得られた。

実践的取り組みに参加した外来看護師 4 名と筆者が参加して評価カンファレンスを開催し、『「提供方法」に基づいた看護実践で患者の生活の再編成に効果的であったこと、なかったこと、困難だったこと』『今回の実践的取り組みの進め方についてよかったこと、適切でなかったこと』をテーマに 45 分の検討を行った。カンファレンスの逐語録を分析した結果、【個々の看護師の実践】として〔患者が実践している療養行動について焦点を当てて話をすることに意味があると思った〕など、【個々の看護師の実践を支えるしくみ】として〔療養指導についてカンファレンスで検討できたこと、他者から意見をもらえたことがよかった〕など、【個々の看護師の実践を支えるしくみにおける課題】として〔面談の時間を確保することに課題がある〕などがあきらかになった。

病棟所属の研究チームメンバー 2 名および病棟師長を対象としたグループインタビューは 1 時間程度実施し、逐語録を分析した結果、【実践的取り組みの成果】として〔決まりきった指導でなく、患者の生活を把握した上で個別的な療養指導が行えるようになった〕などの病棟看護師の看護実践の変化や〔今回の取り組みで外来とつながることができてよかった〕などの病棟看護上の課題解決、〔外来での療養指導による自分たちの看護実践の成果がわかることで病棟看護師の意欲が高まった〕などが明らかになった。

### 第 5 章 全体考察

今回の実践的取り組みを通して、「生活の再編成を支える看護」が病棟看護師と外来看護師に認識され、病棟と外来との協働による継続看護の提供が可能となった。今回の取り組みによって確立された看護提供のしくみが、状況の変化にも耐えうる有機的なシステムで現場に長期的に定着するかどうかは、今後さらに追及する必要があるが、「生活の再編成」を支えるという目的をもった看護提供が、看護師個人の実践にとどまらず、部署全体の取り組みとして行われるという成果が得られた。また、外来での患者面談の場を作ったことで、提供した看護の成果を評価して次の看護実践を行うフィードバックのしくみがつくられた。

以下に AMI 患者の生活の再編成を支える継続看護提供システムの構築のあり方について考察する。

#### I. 看護提供の実践者である看護職によって看護提供システムの目的が共有されること

看護実践を日々行う看護師が研究チームメンバーとして看護提供方法を検討したことで看護実践を行う看護師が認識する現状の課題を解決する方法や看護師が心筋梗塞患者の看護として重要視する看護が「提供方法」に反映された。また、病棟看護師の看護に対する意見や考えを調査し、看護師が重要視している看護があきらかになり、これまで個々の看護師の看護観として機能していた視点が、心筋梗塞患者への看護の指針として、明確に目に見える形でチーム内に共有された。このような取り組みがチームとしての一体感を生み、個々の看護師が自信をもって心筋梗塞患者の生活の再編成を支援することに取り組む姿勢を作ったと考えられた。

#### II. 現場の課題を解決するためのシステム構築の取り組みであること

今回の実践的取り組みの第 1 回・第 2 回研究チーム検討会では、現状の問題・課題として、患者の思いや生活を捉えた支援や病棟と外来で連携した継続看護を行うための記録が不十分であることがあきらかになっていった。しかしながら、「提供方法」に基づいた看護実践では、「生活の再編成に関連した情報の収集および確認」である〔生活の把握〕〔療養行動実施に対する思いの把握〕などが数多く実践されていることがあきらかになり、課題の改善につながる看護実践が行われていた。また、対象患者からは〔自分の療養生活について話を聴いてもらえることがよい〕と評価されていた。さらに、「提供方法」の改訂の中で、療養指導記録の作成や改善が進められ、これまで現場の看護師が課題と認識していた病棟と外来の連携協働をシステムに内包することが可能となった。

現場に定着する看護提供システム構築には、看護の現場で看護実践者に認識されている問題や課題を解決する方策が含まれていることが肝要であり、システム構築を目指す際には現場の実践者が認識する課題を明確にしておく必要がある。

#### III. 現場を変える核となるリーダーの存在

今回の実践的取り組みにおける研究チームメンバーは、取り組み開始以前から、実践の場においてリーダー的役割を發揮しており、卓越した看護実践の見本を示すことのできる看護実践者であった。しかしながら、研究チームメンバーは実践の改善に具体的に着手し、実現する段階には至っていなかった。今回の取り組みでは、外部者である筆者との意見交換により、リーダーの課題認識やチームメンバーへの働きかけが強化されたと考えられ、客観的視点をもってリーダーを支える支援者を確保することが新たな看護提供のしくみを構築するための助力となると考える。

#### IV. 提供した看護を評価するフィードバックの機能を内包すること

本研究の対象施設において、実践的取り組み以前は、外来での療養指導が行われていなかったことから、病棟での療養指導後に患者が退院後にどのような療養生活を送っているか、看護師は情報を得られなかった。しかし、今回の実践的取り組みの開始により、外来で支援が継続されるようになり、患者が在宅で療養行動を継続している様子がわかるようになった。

たことで、自らの看護実践を評価する情報を得ることができるようになった。

今回の取り組みで、病棟での看護実践と退院後の患者の療養行動や病状が記録されるようになり、アセスメント、診断、計画、実施、評価のサイクルをもつ看護過程が十分機能する基盤が整えられたと言える。目的を持った看護が提供され、その評価を行うことが患者のニーズを満たし、看護師の看護に対するやりがいや満足感を高めることになる。したがって、看護実践の基本的なしくみである看護過程が機能するために、継続的に患者に看護を提供し、蓄積された情報を活用できるしくみは看護提供システムの構築には必須である。

#### V. システムの構成要素である個々の看護師の能力と意欲を高めること

本研究の実践的取り組みに参加した看護師らは、自らの看護実践の変化を報告していた。日々の看護業務をせわしなく行いながらも、今回の実践的取り組みにおいて、看護師らは患者に「話を聴く」援助を多く実践しており、この関わりによって看護師は個々の患者のニーズをさらに理解し、患者中心の看護を実践することを可能にし、看護実践の変化に繋がっていた。また、外来看護師らは今回の取り組みで初めて心筋梗塞患者への療養指導に取り組んだが、当初は不安や疑問を抱えていた。しかし、取り組みの評価では事例カンファレンスでの検討や他者から意見をもらうことで、療養指導での困難を乗り越える糧を得ていた。カンファレンスにおいて、個々の患者への具体的な援助方法について計画をたてると同時に、自分たちが今行っている援助の意味や成果を確認し、援助を継続することを確認しており、互いの援助が見えづらく、自分の援助に自信がもてない看護師を勇気づけ、患者と関わる意欲を高める場としてカンファレンスが機能していた。さらに、カンファレンスでのケア検討を通して、復職の際の療養生活の調整や交代勤務者の療養行動の支援など多くの課題に気づき、学習や検討の必要性を気付かせる場となっていた。

提供する看護の質を向上させる機能をもつシステムを構築するためには、看護実践の成果を確認し、問題や課題を明確にするしくみを内包する必要がある、カンファレンスは有効な方法であると考えられた。

#### VI. 今後の課題

生活の再編成に取り組む急性心筋梗塞患者への支援は多職種で提供されており、本研究対象施設においても、栄養士や薬剤師、理学療法士との情報共有がなされたうえで協働した支援提供がなされていた。しかしながら、本研究は看護師が行う実践、中でも病棟と外来との協働した看護提供を中心として支援を検討しており、今後は他職種との協働についても取り組み、丁寧に記述することでさらに深い考察が得られると考える。

また、今後はさらに病院の機能分化がすすみ、診療所と協働した心筋梗塞患者への医療提供が行われることを見込み、地域の医療資源も含めた看護提供システムを検討する必要がある。

#### 文献

原田浩二，森山美知子，百田武司．(2011)．心筋梗塞患者の再発予防に向けた地域連携と患者教

育の実態. 日本医療マネジメント学会雑誌, 12(3), 156-160.

松本祐子. (2012). 虚血性心疾患患者の健康行動維持にむけ入院急性期から外来、かかりつけ医を巻き込んだシームレスな取り組み. 日本循環器看護学会誌, 8(1), 40-42.

宮園真美, 橋口暢子, 澤渡浩之. (2012). 多疾患を有する虚血性心疾患患者への退院後介入の検討. 日本循環器看護学会誌, 8(1), 45-46.